

〔課題演習抄録〕

当事者意識を高める中学校社会科授業構想
-体験学習の在り方に着目して-

西 法 志

Noriyuki NISHI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：当事者意識，体験学習

1 研究の目的

社会科の学習指導上の課題として、主体的に社会の形成に参画する態度の育成があげられる（文部科学省 2017）。その課題を解決するためには、生徒の当事者意識を高め、社会的事象を他人事ではなく自分事としてとらえさせる必要があると考える。日本社会科教育学会（2016）は、「体験学習には直接体験・模擬体験・疑似体験・間接体験といった区分があり、問題を明確にとらえさせ物事の本質に気づかせる上で価値高い」と示している。そこで、社会科の学習活動に体験学習を取り入れ、生徒が事象の本質に気づき、問題を自分事としてとらえ、当事者意識を高めることにつないでいきたいと考える。

2 研究の計画

4月・5月	研究構想と教材研究
6月・7月・8月9月	授業実践Ⅰの実施と分析・まとめ
10月・11月	研究構想と教材研究
12月・1月	授業実践Ⅱの実施と分析・まとめ

3 研究の内容

(1) 実践授業Ⅰ

単元名	日本の戦争拡大から終戦まで（全5時間）
本 時	太平洋戦争下の人々の暮らし（1/5）
実施日	平成29年6月12日
学習者	福岡県内J中学校：第3学年（36名）
主 眼	太平洋戦争下の民衆の生活の様子を、追体験の学習活動を通して推測することができるようになる。

①体験学習の実際

李明熙（1995）は「歴史学習において、追体験の歴史学習を行うことで、学習者と歴史的過去との直接的な対面を保障することができる」と述べている。そこで、本実践では、「衣料切符制度」と

「食生活」を取り扱う学習場面に追体験的活動を取り入れることにした。

衣料切符制度では、「100点分の切符でどれだけ衣服を購入できるか」の追体験的活動を行った。追体験的活動における生徒の記述では、31/36人（86%）の生徒が衣料切符制度の実情や当時の人々の苦悩に気づくことができた。

食生活では「当時の人はどれくらい米を食べることができたか」の追体験的活動を行い、当時配給されていた一日分の米の量、約330gを入れた袋を配り、当時配給されていた一日分の米の量を予想させた。

表1 当時の食生活の追体験的活動の場面（一部抜粋）

T: 当時配られた一日分の米の量を持ってきました。実際に持ってみておおよそ何gくらいか予想してください。	
C: 100g以下	10人程度
100～200g	20人程度
200～300g	4～5人
300g	: なし
T: 実は当時330g米をもらっていたそうです。330gとは、だいたいお茶碗2杯分です。	
C: 十分だと思います。	

当時食べることができた一日の米の量は約330gであるが、生徒の予想した量はそれを下回る結果であり、また「十分」という発言も聞かれたことから、当時の人々の苦悩に十分迫ることはできなかった（表1）。

表2 授業を通して分かったことの記述（全36人）

分類	項目	人数
当事者意識を感じ問題意識の高まりを感じる記述	問題意識の記述	4人
	学習したことからこれからの生活に生かそうとする記述	3人
当事者意識を踏まえた記述	当事者と共感的な記述	14人
	当事者と対照的な記述	1人
理解したことへの記述	理解したことから感じたことを記述	3人
	理解したことへの記述	11人

授業後の感想の記述からは、22/36名（61%）の生徒が過去の事象を自分事として捉えたことが分かる（表2）。

②考察

本実践では、当事者意識を高めるために追体験的活動を取り入れた。衣料切符制度では、多くの

生徒が、衣料切符制度の実情や当時の人々の思いをとらえており、体験学習は、当事者意識を高める上で一定の効果があると考ええる。一方、食生活の学習場面では、生徒にとって米の知識が十分でなく、また、米を食べる機会が減少している等の実態もあり、当時の人々の苦悩に十分気づかせることができなかった。今後、生徒の実態を踏まえ、生徒が事象をどうとらえるかに十分留意した体験学習に取り組む必要がある。

(2) 実践授業Ⅱ

単元名	消費生活と経済のしくみ（全5時間）
本 時	私たちと消費生活（1/5）
実施日	平成29年12月1日
学習者	福岡県内J中学校：第3学年（35名）
主 眼	商品を選択する際に、商品の特色をよく理解し商品を選択することの大切さを理解する。

①体験学習の実際

本実践では、商品の特色を理解し商品を購入することの大切さを理解させるために、生徒にとって身近なポテトチップス6種類を取り上げ、模擬的消費活動を行うことにした。

まず、6つの商品の特色（表3）を資料から読み取らせ、その資料をもとに自分に合った商品を選択させる活動を行った。この活動では、ほとんどの生徒が自分なりに商品を選択し、その理由を記述した（表4）。

表3 ポテトチップスの商品名と商品の特色

製造者名（商品名）	商品の特色
カルビー （ポテトチップス）	値段が安く会社のブランド性が高い
イオン【グリーンアイフリーフロム】 （塩だけで味付けしたポテトチップス）	6つの商品の中で一番安い グリーンアイフリーフロムという安心安全と環境に配慮したブランドをかかげている
レイズ （ポテトチップス）	6つの商品の中で一番高い 内容量が一番多い 外国の製品で遺伝子組み換え不分別となっている
湖池屋 （コイケヤブライドポテト）	値段は高い 品質の良いじゃがいもを使用している
ノースカラーズ （純国産ポテトチップス）	値段は少し高い 純国産の原材料を使用している
テラフーズ （焼きじゃが）	値段は少し高い ノンフライ製法でカロリーが少ない

表4 生徒が選択した商品と選択した理由（全35人）

製造会社名（商品名略）	項目	人数
カルビー	ブランド性のみに着目	4人
	安全性のみに着目	3人
	ブランド性・値段・安心安全等の複数に着目	16人
イオン	安心安全のみに着目	2人
	安心安全と値段に着目	1人
湖池屋	じゃがいもの品質のみに着目	1人
	じゃがいもの品質と値段に着目	1人
ノースカラーズ	安心安全のみに着目	1人
テラフーズ	健康への配慮のみに着目	3人
	健康への配慮や値段等に着目	2人
購入しない	種類がたくさんあると選べない	1人

次に、選択した商品とその理由について、全体での交流を行った。この活動では、他の商品の特色に気づき、消費者のニーズによって様々な種類の製品がつくられていることに気付いていた。

授業後の感想では、授業のねらいを達成した生徒が32/35名（91%）であった（表5）。

表5 授業後の生徒の感想（全35人）

基準	生徒の記述の分類項目	人数
A判定	根拠をもとに商品の特色を理解し自分に合った商品を購入し、自らの行動を見直した記述	5人
	根拠をもとに商品の特色を理解し自分に合った商品を購入する大切さへの記述	10人
B判定	商品の特色を理解し自分に合った商品を購入し、自らの行動を見直した記述	2人
	商品の特色を理解し自分に合った商品を購入する大切さへの記述	15人
C判定	商品の特色を理解することの重要性への記述	1人
	その他	2人

②考察

本実践では、ポテトチップスを取り上げた模擬的消費活動を行った。生徒にとってポテトチップスは身近な商品であり、活動に意欲的に取り組んだ。模擬的消費活動を通して、多くの生徒が商品の特色を資料から読み取り、自分に合った商品を選択し、全体で交流したことで、商品の特色を理解し商品を購入することの大切さに気づくことができており、体験学習は当事者意識を高める上で一定の効果があると考ええる。

しかし、根拠をもとに商品の特色を理解し商品を購入することの大切さを記述できた（A判定）生徒は15/35名（43%）にとどまった（表5）。全体交流の際に、商品の特色を理解し商品を購入することの意義を考えさせる発問や生徒の発言への価値づけを充実させていく等、体験学習での経験を活用する手立てを充実させる必要がある。

4 成果と課題

○体験学習は、当事者意識を高める上で効果的であることが明らかになった。

●体験学習で考えたこと等の経験を活用し、生徒の考えをさらに深めるための全体交流のあり方を検討する必要がある。

主な引用・参考文献

文部科学省 2017 学習指導要領解説-社会編-
日本社会科教育学会 2016 社会科教育事典 ギョウセイ
李明熙 1995 「追体験」的歴史学習の可能性と意義-R. G. コリングウッドの「re-enactment doctrine」の再構成を通して-日本教育学会大会研究発表要項 54